

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第117号

令和2年10月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

正平3年(1348)1月5日、楠正行の四條畷合戦

巳の刻(午前10時)から申の刻(午後4時)激闘6時間

窮地にあつて、上山の偽首を丁重に扱う心の持ち主

● 当時の戦いを改めて振り返る ●

私たちは、平成28年5月と10月、2回に分けて「四條畷の合戦、その戦跡を訪ねて歩く」と題して現地学習を行った。

この時は、正平3年1月5日、正行が本陣を置いた河内往生院(東大阪市)から、弟、正時と刺し違えて自刃したハラキリ字地(大東市津の辺)まで、河内名所図会や今に残る近世・近代の関連写真や資料を見て、当時の戦いの様相を想像しながら、一日の死闘を振り返った。今回の例会では、改めて、楠正行、四條畷の合戦の一日を再確認した。

● 正行1000騎×師直35000騎 ●

四條畷の合戦、吉野朝・宮軍の布陣は、本営(楨尾山)300、右軍(四条隆資)6000、中軍(楠正行)1000、左軍(北畠親房)1500、東条守備(楠正儀)1500、吉野守備300、計10,600騎と思われる。

そして、中軍・楠隊1000騎の布陣は、前衛は正行、正時、正家ら600、後衛は大塚惟正、賢秀ら400。

そして、相対する高師直軍は、5道・15国から集められた35,450騎という大軍であった。

● 早朝、本陣河内往生院から馬駈ける ●

この日、早朝に河内往生院を発した正行は、途中、枚岡神社に立ち寄り、馬や武具を奉納して武運を祈願する。そして、正行が合戦の前に“身を清めた”と伝わる首洗いの井戸が、今も残っている。

河内湾、河内潟そして河内湖と変遷してきた河内一帯は、この頃、深野池と新開池を中心に広がる河内湿原状

態で、軍馬は自由に往来することができず、南北の交通は東高野街道一本のみで、当時おどろいっばいにススキ野原広がる状態であった。

江戸時代に描かれた河内名所図会を見ても、四條畷合戦図や野崎参り図には、ほとんど民家は見られない。河内湾、河内潟、河内湖、河内湿原と変わりゆく中で、軍馬が自由に往来できたのは、生駒山・飯盛山の山腹を南北に貫く大道:東高野街道のみで、しかも飯盛山と深野池の間の狭隘な地、四條畷において他には戦いの場は考えられず、私は「河内平野形成9000年の歴史が正行を四條畷にいざなった」と訴えている。

● 大東市野崎が、最初の衝突 ●

正行と師直軍衝突の第1期は、今の野崎観音の北方に位置する野崎岩辺りに布陣していた縣下野守3200騎である。巳の刻(午前10時)に始まった衝突では、賢秀らの活躍で撃退し、下野守は深手を負って退却をする。

野崎岩から東高野街道を北へ700メートルほど進んだ北条2丁目辺りで、大旗隊1600、小旗隊1400、小旗一揆衆48騎、武田伊豆守1000、佐々木道譽3000と第2期衝突を繰り返す。

前面を小松原・北条神社から駆け下ってきた小旗一揆衆に遮られ、背面を飯盛山の中腹から三手に分かれて急襲してきた佐々木道譽軍に攻められ、正行隊後衛400騎は、ここでほぼ全滅する憂き目にあう。

● 十念寺に残る版木に楠兵の怨霊 ●

ここに建つ十念寺に残る版木には、”霊魂永禄年中に至るまで、山野に火を立て、夜な夜な相闘聲耳に夥し…”と謳われ、四條畷の合戦後200年もたつ織豊期に至るま

で、ここで亡くなった楠軍の武将たちの怨霊におののいた地域の人々の祈りによって十念寺が再建されたことが分かる。おそらく、古戦田字地名残るこの地一帯で、壮絶な戦いが繰り広げられたのであろう。

後衛が崩れてもひるむことなく正行隊は師直本陣を目指して北へ北へと進む。権現川沿いに、四條畷神社大鳥居（今は台風禍で倒れて、立っていない）辺りから旧法務局跡地辺りまでの南北約1キロの間に、師直軍3陣、細川相模守ら5700騎、細川讃岐守ら7100騎、松田備前守ら6100騎、合わせて18,900騎が布陣していた。

しかし、ここに布陣した各大将は、小勢ながら正行の勢いに押されたか、第2期衝突で大敗を期した正行の後退を予測したのか、はたまた正行の意気に感じ道を開けようとしたのか、戦意を示すことなく、大きな衝突もなく正行隊は更に北へ、そして師直本陣めがけて西方へと進んだ。

● 下馬した正行、兵糧食をとる余裕も ●

このあたりのどこかの田まで、愛馬初霜から下馬した正行は、残った正行隊を集め、兵糧食をとる余裕を見せる。おそらく、この正行の余裕ぶりを知った師直は自陣のふがいない戦いぶりに激怒したことであろう。

四條畷法務局跡地辺りの当時の様子を想像できる内容が、四條畷市民総合センターの緞帳に描かれている。絵には、深野池に浮かぶ船、そして正法寺、雁屋村、南野村が描かれ、東高野街道沿いには一面のススキ野原が広がっている。

第4期、正行隊は、師直本陣半町、約55メートルに迫る。ここ中野では、東西に走る清滝川周辺（四條畷消防署近辺）に師直5300騎は本陣を構えていた。

師直にも優秀な部下がいたようである。

「やあやあ、我こそは、源氏代々の執事、その武功天下にとどろく高野武蔵守師直なり。」と名乗る武将を討ちとると、その首は、上山六郎左衛門の偽首であった。

この時、正行は、「上山、そなたは日本一勇敢な武将。他の者の首とは一緒にするまい。」と、着ていた小袖の片袖を引きちぎって、上山の首を包んで、岸の上に置く心遣いを見せる。窮地にあっても、人を思いやる心を持つ正行の真髓を示す場面でもある。

● 須々木四郎の強弓に力尽きる ●

上山の偽首に落胆するも、正行は再び態勢を立て直そうと南に向いて後退を始めるが、そのススキ野原一帯を覆うように隠し配備された弓隊の攻撃を受ける。

高師兼が記した弓隊の中心に、九州強弓の名人、須々木四郎がいた。

第5期の衝突は、この弓隊の攻撃を一方的に受けたものと思われる。今の小楠公墓所の前あたりに、小さい範囲ではあるが古戦田字地が残る。おそらくこの辺りと思

われる場所で、正行は、3人張りといわれる須々木四郎の強弓を受け、左右の膝頭、右の頬、左の目じりを射られる。また、弟正時は、眉間と喉の脇を射られた。

正行は、「もはや、これまで。敵の手に掛かるまい。」と、最期となる適地を求めて約1キロ南へさ迷い歩き、権現川の堤防上、大東市津の辺の地で、正行と正時は相刺し違えて亡くなる。時は申の刻（午後4時）で、一日6時間の死闘であった。

● 正行最期の地はハラキリ字地 ●

正行最期の地には、ハラキリ字地名が残り、明治23年四條畷神社創建後は、四條畷神社の祭礼においてこの地は御旅所となり、神事が行われてきた。正行最期の地は、地域の人々の心のよりどころとなり、祭神たる正行に親しみを感じる場所であった。昭和35年ごろまでは、4~5本の大樹に囲まれ、4月5日の大祭には“御渡りさん”が出御してきた土地であったが、今は開発が進み、その面影は残っていない。ただ一つ救いは、大東市歴史的資源活用基本方針には、古戦田字地も含めハラキリ字地であったことを示す解説版が必要であると明記されていることである。ぜひ、早期の実現を望みたい。

正行、正時討ち死に後、和田賢秀は長刀を杖代わりに師直本陣を突くが、見破られ、湯浅太郎左衛門を睨みつけながら最期を遂げる。この時、かみついたとの伝承が残り、和田賢秀を葬る塚脇の墓は“歯がみさん”として親しまれ、多くの人が参詣する。

そして、若い正行を軍事面で支えてきた大塚惟正は、いったん落ち延びるも、正行最期を聞きつけ、取って返し敵陣に切り込んで討ち死にをする。

正行を葬る小楠公墓（雁屋）は、明治11年に拡張・拡張が行われ、7メートル50センチ総高さの巨石碑の建碑式が執り行われた。基礎工事として5メートル四方深さ4.5メートル掘りこまれ、松生杭250本、大石650個、砂礫500駄、石灰200俵で固められており、阪神淡路大震災でもこの巨石碑はびくともしなかった。地域の人々の正行に寄せる思いの深さが感じられる基礎である。

今、正行の墓は、四條畷市雁屋の小楠公墓所以外にも、京都市右京区嵯峨野の宝篋院、宇治市六地蔵の正行寺、東大阪市六万寺の往生院、同山手町の首塚、そして遠く落人伝説の残る鹿児島県甕島の正行墓と、全国に6か所が残る。

とりわけ、宝篋院の正行の首塚は、足利二代將軍足利義詮の墓と敵・味方二つ並んで祀られている。義詮生前に、ここに正行が葬られていることを知り、「わしが死んだら、正行墓の傍に葬ってくれ。」との遺言によるもので、敵の將軍にも畏敬を受けた正行の魅力を今に伝えている。紅葉で有名になった宝篋院だが、庭の奥にひっそりと並び立つ二人の墓を、ぜひ、訪れていただきたい。

（文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭）